

ECBは政策金利を据え置き、慎重姿勢ながらも利上げ方向を明示

- ECBは全会一致で政策金利の据え置きを決定
- 利上げに向けた追加データの見極めを優先
- 引き締めバイアスを維持し、6月利上げを視野に

■ ECBは中銀預金金利を2.0%に維持

欧州中央銀行(ECB)は4月30日、全会一致で政策金利を据え置き、中銀預金金利を2.0%に維持しました(図1)。

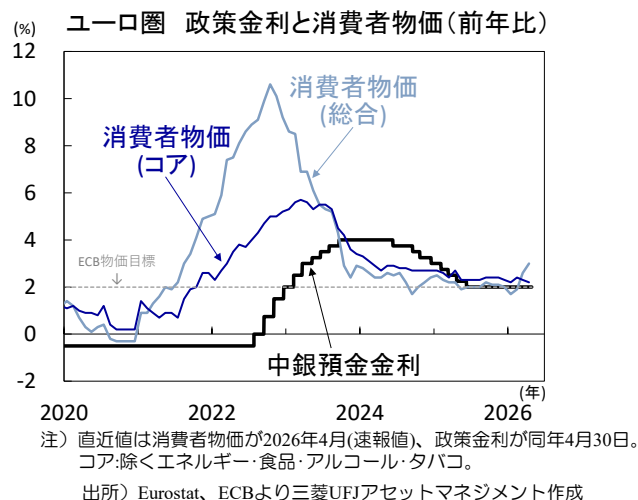
声明では、インフレの上振れリスクと成長の下振れリスクが強まっていると指摘。もっとも、ECBは、基調インフレ指標はここ数カ月間ほとんど変化せず、ECBの調査が2026年中に労働コストの緩和を示唆し続けている点や、短期のインフレ期待が大きく上昇する一方で長期のインフレ期待が2%前後で推移している点は(図2)、中期的にインフレが物価目標付近で安定することを支えるとの見解を示しています。現時点のデータからは、エネルギー価格上昇に伴う二次的影響の明確な兆候は確認されておらず、政策金利は中立水準付近に位置。このためECBは、次回6月政策理事会において、より「情報に基づいた」判断を行うべく、追加のデータを待ちつつ情勢の推移を見極めることが適切と判断したものとみられます。

■ 慎重姿勢ながら引き締めバイアスを明示

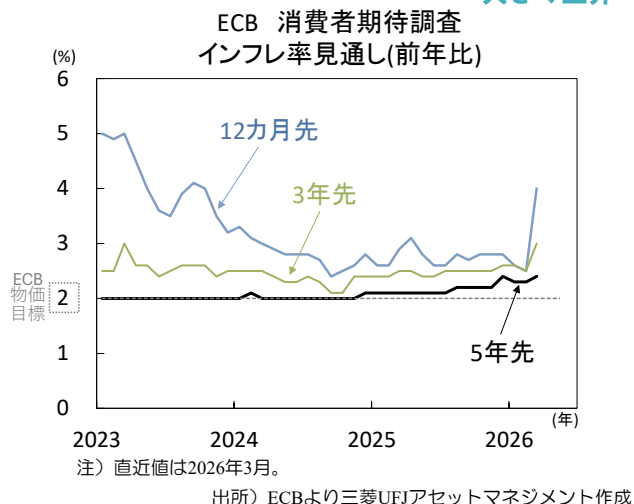
一方、ラガルド総裁は記者会見で、「方向性としては我々がどこに向かっているか認識している」と述べ、政策が引き締め方向であることを示唆しました。さらに、3月時点のスタッフ経済見通しのベースシナリオには2回の利上げが織り込まれていた点にも言及し、現状は同シナリオから逸脱しつつあるとの認識を示すなど、インフレ上振れリスクを意識したタカ派的スタンスをにじませています。最大の不確実性として中東情勢を挙げ、仮に紛争が収束しても供給制約の影響は残る可能性が高く、インフレには上昇圧力が残りやすいとも指摘。リスク管理の観点からも、6月会合での利上げは不可避の様相です。

また、足元では一部景気指標に弱さもみられ(図3)、短期的な成長率は低水準にとどまると予想されるものの、完全な景気後退には至らないとの見方が示され、ラガルド総裁はスタグフレーション懸念を否定。ECBは成長の下振れ懸念を急速に強めている状況になく、6月以降の利上げ開始を視野に、データ次第で段階的な引き締めが進められる可能性が高く、エネルギー価格上昇による二次的影響や成長動向が引き続き注視されます。(吉永)

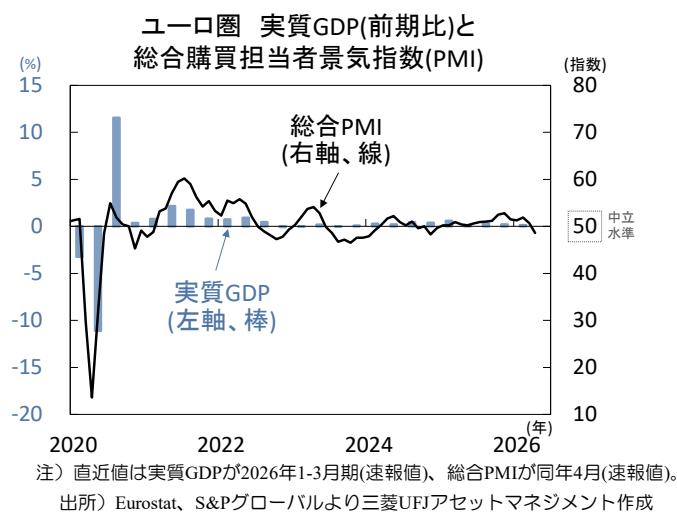
【図1】 ECBは政策金利を据え置き、利上げに向けた追加データを見極めへ



【図2】 消費者のインフレ期待は短期を中心に大きく上昇



【図3】 ユーロ圏の景気先行き懸念強まるも、1-3月期成長率は底堅く推移



本資料に関してご留意頂きたい事項

- 本資料は、投資環境等に関する情報提供のために三菱UFJアセットマネジメントが作成した資料であり、金融商品取引法に基づく開示資料ではありません。販売会社が投資勧誘に使用することを想定して作成したものではありません。
- 本資料の内容は作成時点のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 本資料は信頼できると判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性等を保証するものではありません。
- 各ページのグラフ・データ等は、過去の実績・状況または作成時点での見通し・分析であり、将来の市場環境の変動や運用状況・成果を示唆・保証するものではありません。また、税金・手数料等を考慮していません。
- 本資料に示す意見等は、特に断りのない限り本資料作成日現在の三菱UFJアセットマネジメント ストラテジック・リサーチ部リサーチグループの見解です。また、三菱UFJアセットマネジメントが設定・運用する各ファンドにおける投資判断がこれらの見解に基づくものとは限りません。



三菱UFJアセットマネジメント

三菱UFJアセットマネジメント株式会社
金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第404号
加入協会：一般社団法人資産運用業協会